チャイルド・ファンド・ジャパンだより

[スマイルズ] 2020年2月NO.47

SMILES

https://www.childfund.or.jp

特集

想定外の自然災害に みんなで助け合う

ChildFund Japan

チャイルド・ファンド・ジャパンは、1975年より、
アジアを中心に貧困の中で暮らす子どもの健やかな成長、
家族と地域の自立を目指した活動をしています。

想定外の自然災害にみんなで助け合う

2019年10月12日に上陸した台風19号によりお亡くなりになられた方々に謹んで悔やみ申しあげます。また、被災された方々には、心よりお見舞い申しあげます。

チャイルド・ファンド・ジャパンは、ワールドラグビーやチャイルド・ファンド・アライアンス、支援者の皆さまからのご寄付により、台風19号で氾濫した長野県・千曲川近辺の被災地を中心に緊急復興支援を開始し、現在も活動を続けております。今回の特集では、国際協力NGOがおこなう日本国内での緊急復興支援についてご紹介いたします。

「公助」から「共助」へ

近年の自然災害を見ると、想定を超える災害が増えています(表1参照)。災害の規模で見ると、震度7を記録する地震が発生し、猛烈な台風*1やカテゴリー5*2の台風が上陸しています。これにより被害の規模も大きく、さらに広域にいくつかの市町村や都道府県に及んでいます。日本政府は甚大な被害をもたらす災害を「激甚災害」と認定して被災した地方自治体を財政的に支援します。

日本では公的機関が市民を災害から守ってくれるものという認識があり、「公助」に頼った災害対応をしてきました。しかし、政府でも、経験値を超える津波の高さ、強度の揺れ、氾濫水位の高さへの対応は困難です。公的機関がさらに高い防波堤やより強度な耐震構造といったインフラ整備を進めることは必要ではありますが、それでも被

＊1　最＊大風速54m/s(105ノット)以上
＊2　米軍合同台風警報センターによる5段階区分の最大規模

表1　甚大な災害の増加

発災年	激甚災害指定件数	主な災害名	主な被災地	規模
2011年		東日本大震災	青森県・岩手県・宮城県・福島県・茨城県・栃木県・千葉県・新潟県・長野県	震度7 M8.4
2014年	5件			
2015年	4件			
2016年	5件	平成28年熊本地震	熊本県等	震度7 M7.3
2017年	4件			
2018年	5件	梅雨前線(平成30年7月豪雨等)・台風第5号・第6号・第7号・第8号	岡山県・広島県・愛媛県	
		平成30年北海道胆振東部地震	北海道	震度7 M6.7
2019年	3件	前線による豪雨・台風第10号・第13号・第15号・第17号	佐賀県・千葉県	カテゴリー4
		台風19号	岩手県・宮城県・福島県・茨城県・栃木県・群馬県・埼玉県・千葉県・東京都・神奈川県・新潟県・山梨県・長野県・静岡県	カテゴリー5

出典:内閣府、日本気象協会、米軍合同台風警報センター

害を防げない災害が起こっています。

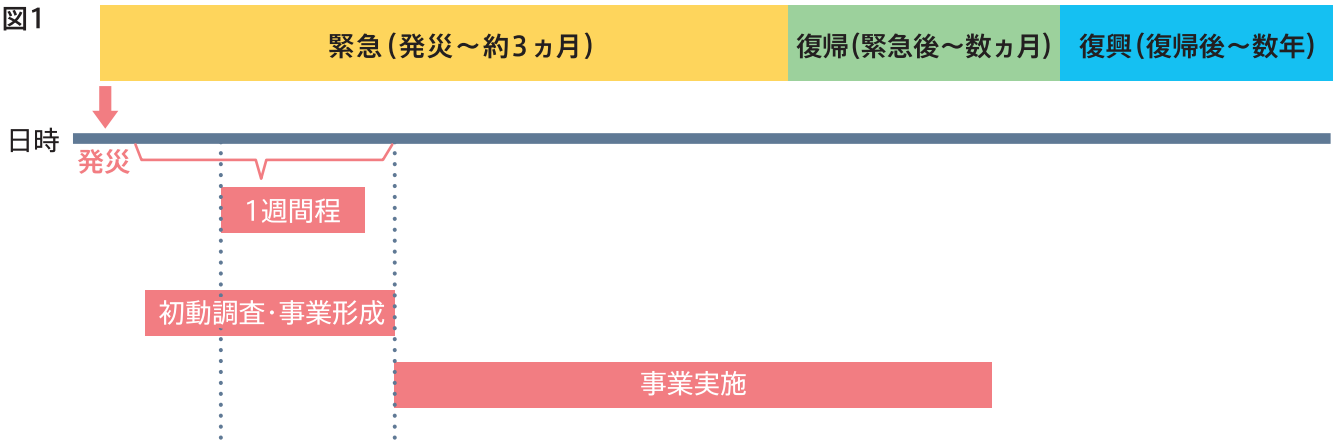
実際、阪神・淡路大震災や東日本大震災では地方自治体も被災し、公的機関による「公助」の限界が明らかになりました。内閣府『防災白書』などによると、これらの大災害以降、自分で身を守る「自助」と近所や地域の人たちで助け合う「共助」の意識が高まりつつあります。

「共助」とは町会や学区などを中心としたコミュニティが自主的に避難体制を整え、緊急対応をして、再生・復興していくことです。この「共助」をサポートする支援は、チャイルド・ファンド・ジャパンをはじめ、海外でコミュニティの開発支援を行ってきた国際協力NGOが得意とするものです。海外での経験を活かし、日本国内でも貢献する団体が多くなっています。

緊急支援に欠かせない初動調査

緊急支援は、①発災直後の緊急段階（発災から約3ヵ月）、②復帰段階（緊急後から数ヵ月）、③復興段階（復帰後から数年）と大きく3つの段階にわかれます。そして、緊急段階は初動調査をおこなった後、事業形成をおこないます（図1参照）。

図1



最初におこなう初動調査では、現状とニーズの把握、ニーズを満たす方法の理解、支援が必要な人数の推定、リスクの高いグループの特定などをおこないます。この調査をしっかりおこなわないと、適切な支援はできません。

今回、チャイルド・ファンド・ジャパンは、シャンティ国際ボランティア会と協働して、被災状況や様々な要因を検討した結果、長野県で避難状況や被災状況について情報収集するための初動調査をおこないました。

10月16日から18日にかけておこなった初動調査には、チャイルド・ファンド・ジャパンの職員2名が参加し、氾濫した千曲川周辺の長野市、中野市、須坂市、小布施町などの避難所を訪れました。避難所では、行政からの支援では配布されにくい女性用の衛生用品を届けつつ、被災された方々、公的機関や地元のNPOなどにお話を伺い、子どもと保護者、さらには高齢者のニーズを把握しました。また、地元のNPOとの連携も実現しました。

シャンティ国際ボランティア会の担当者と協働して初動調査をおこなうチャイルド・ファンド・ジャパン事務局長の武田(左)

被災された方のお話を聞き、ニーズを確認します

事業形成と事業実施

この初動調査を基に、長野県内の被災者の中でも、特に子どもたちと保護者の方々が1日も早く元の生活スタイルを取り戻せるようサポートすることを目標に、事業を形成していきました。

当時、長野市内では浸水被害を受けたことにより休校が続く学校があり、学校が再開するまでの間、子どもたちが勉強したり遊んだりする場所が必要でした。そこで、地元のNPO法人「ながのこどもの城いきいきプロジェクト」と一緒に、子どもたちが安心して過ごせる「場」づくりを始めました。

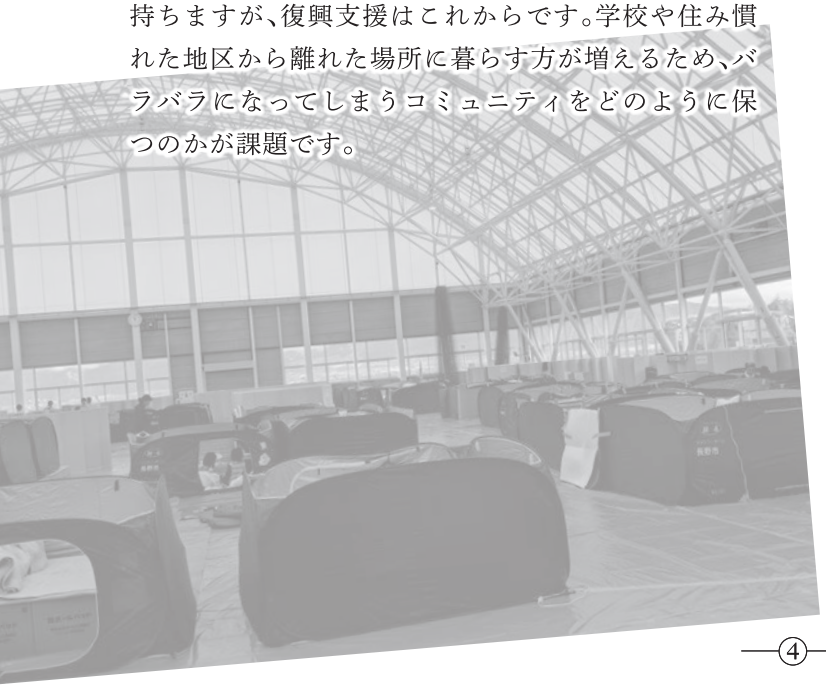
子どもたちがのびのびと遊べる場所を準備するとともに、受験を控えている子どもたちが静かに集中して勉強できる場所の確保も必要でした。そこで、避難所の中にあった倉庫を片付け、学習スペースを確保しました。それまでは、話し声がする避難所の床やダンボールベッドを使って勉強していましたが、学習スペースが設置されてからは落ち着いて勉強することができるようになりました。「机と椅子があり、暖房も効いているところで勉強できるようになり、本当によかった！」と子どもたちから喜びの声も届きました。

避難所の遊び場の様子

学習スペースで勉強する子どもたち

避難所が閉鎖され、次の支援へ

12月に長野県内すべての避難所が閉鎖され、住民の方々は仮設住宅や借り上げ住宅などに移られました。避難所の閉鎖は支援が一段落したようなイメージを持ちますが、復興支援はこれからです。学校や住み慣れた地区から離れた場所に暮らす方が増えるため、バラバラになってしまうコミュニティをどのように保つのかが課題です。



チャイルド・ファンド・ジャパンは長年住民の方々が築きあげてきたコミュニティをどのように維持するか、住民の方々と一緒に話し合いを重ねています。チャイルド・ファンド・ジャパンがアジアの国々で45年実施してきたコミュニティ開発支援の経験を活かし、今後も近所や地域の人たちで助け合う「共助」をサポートしてまいります。

ウェブサイトより台風19号被災者支援へのご寄付を受け付けております。

多様性を感じた ラグビーワールドカップ2019 日本大会

機関紙SMILES前号（46号）の特集でもご紹介いたしましたとおり、チャイルド・ファンドは、ラグビーワールドカップ2019日本大会で、大会を主催するワールドラグビーの公認チャリティパートナーでした。チャイルド・ファンド・ジャパンは、チャイルド・ファンド・アライアンスの一員として、同大会に参加しました。多くの方々に感動を与えた大会の中でおこなったチャイルド・ファンドの活動についてご報告いたします。

ラグビーファンの多くの方々が“ONE TEAM”となって、チャイルド・ファンドへのご支援に賛同してくださいました。ラグビーワールドカップ2019日本大会を通じての寄付総額は２億５千万円を超える大会史上最高額となりました。アジアの厳しい環境にいる子どもたち2万5千人が、ラグビーを通じてライフスキルを身につけるためのプログラム「チャイルド・ファンド パス・イット・バック」に参加することを可能にしました。また、ワールドラグビーからの要望で、寄付金の一部は令和元年台風19号被災者支援のために活用されることになりました。

オリンピック、サッカーワールドカップと並び、「世界3大スポーツ大会」の1つとされるラグビーワールドカップで、チャイルド・ファンドは多くの協働機会に恵まれました。まず、2018年に日本ラグビーフットボール協会とチャイルド・ファンドが合同記者会見を行い、次の世代を担う子どもたちへレガシーを残すために活動を行う決意を表明しました。2019年9月20日の開会式で、チャイルド・ファンドなどが招いた日本とアジアの子どもたちが旗手を務め、開幕戦で使用されたホイッスルは、チャイルド・ファンドへのチャリティ活動として前回開催地ロンドンから東京まで二人の男性が自転車をこいで運んで来たものでした。また、注目された日本対スコットランドの一戦で選手とともにグランドに向かい試合ボールを運んだ少年は、チャイルド・ファンドが開幕前に行った国際交流イベントで選出されたMVP選手でした。

各試合会場の大スクリーンには、チャイルド・ファンドを紹介する映像が流れ、パブリックビューイング（ファンゾーン）やオーストラリアなどの海外のテレビ局でも同様の放映がされました。試合会場を取り巻くLED看板にはチャイルド・ファンドのロゴが映し出され、様々な試合会場で選手たちによる懸命なプレイの結果生まれた名場面を彩ることができました。

そして、スポンサー企業のご支援の元、アジアの厳しい環境にいる子どもたちを日本に招待してイベントを数回行い、その様子はNHKや日本テレビなどの報道番組、朝日、読売などの新聞、ヤフーニュースや地方自治体の広報紙、日本政府のFacebook（英文）などで幅広く取りあげていただくことができました。

今大会は選手の活躍に伴い、全12会場45試合（台風のため3試合中止）で、170万５千人近くの観客数を動員。国内のテレビ最高瞬間視聴率はスコットランド戦の53.7%を記録し、日本戦を国内で述べ8,700万人が視聴したとも言われています。流行語大賞もラグビー日本代表のスローガン“ONE TEAM”に決まり、日本では大きなブームを巻き起こました。世界的には総視聴者数が41億人に達したと発表され、チャイルド・ファンドが公認チャリティパートナーとして、子どもたちのために活動していることを世界に広く知っていただくチャンスとなりました。

多くの人々の記憶に残る大会となったラグビーワールドカップ2019日本大会は終わりましたが、チャイルド・ファンド・ジャパンは、引き続き、アライアンスの一員として、今後も様々な国際的な大会などに協力していきます。

担当者より

チャイルド・ファンド・ジャパン
パートナーシップ・マネージャー
田中

ラグビーワールドカップ2019日本大会に関わる広報とマーケティングを担当いたしましたが、大会を通してダイバーシティ（多様性）について考える機会が多くありました。私は、大学院で異文化コミュニケーションを研究してMBAをとり、企業で有効活用していました。今回、異文化を受け入れる土壌が全くない環境に身をおくことが多く、任務を全うする難しさを痛感しました。岡倉天心の著書「東洋の思想」にあるように日本文化は独特です。スコットランドが開催国（日本）有利と公に大会批判を行ったことで700万円の罰金が課せられましたが、背景には日本の環境や風土への不安が募ったことが要因の一つだろうと思います。報道番組でラグビー観戦でのビール消費量の平均はサッカーの６倍と聞いて驚きましたが、実際に彼らの体格の豊かさや英国のパブ文化との関連を感じ取りながら大ジョッキを数口で飲み干す姿を何度も見ると、“当たり前”と思えてくるものです。“普通”の定義は決して一つではありません。今回の試練を経て、柔軟に異文化を楽しんで受け入れる度量は人としての豊かさにつながるだろうと思いました。

NEPAL

災害に強い学校づくり 第2期へ

2015年に起きたネパール大地震は、私たちの支援事業地であるシンドゥパルチョーク郡を直撃し、とりわけ学校施設は547校が全半壊するなど、子どもたちの教育に大きな影響を与えました。2018年11月より開始した「災害に強い学校づくりプロジェクト」は第1期を無事終え、第2期を迎えます。引き続き、子どもたちが守られる環境を整えることを目指します。

ジャナジャグリティ校の校舎が完成！

第1期では、日本NGO連携無償資金協力と、皆さまからのご支援により、1年生から10年生までが通うジャナジャグリティ校に2階建て6教室の校舎を建設しました。また、手洗い場と校舎周辺の敷地も整備しました。2019年9月におこなわれた校舎の竣工式には、在ネパール日本国大使館の吉野一等書記官をはじめ、地元政府関係者、近隣の学校の校長、生徒、地域住民が集まって盛大に完成を祝いました。吉野一等書記官からは子どもたちに向けて「きれいな教室が完成して私も嬉しい。皆さんもここでしっかり勉強してください」との励ましの言葉があり、郡の政府関係者は建設された校舎の質の良さを高く評価しました。子どもたちは、「今までは（地震直後に廃材で建設した仮設校舎は）教室が暗く、冬は寒く夏は暑いので、授業に集中することが難しかったけど、新しく完成した鉄筋コンクリートの校舎は地震がきても安心で、きれいな教室で勉強できて幸せ」と、とても嬉しそうでした。先生たちも安全で落ち着いた教室で授業ができるようになったことを大変喜んでいました。

新しい教室は暖かい太陽の光が入り、きれいで、学校に来るのが楽しみ！

学校に通う子どもたち

完成した校舎

第2期事業の資金贈与契約 ジャナタ校の建設開始

ジャナジャグリティ校に続く第2期の事業開始に向けて、2019年12月に在ネパール日本国大使館で資金贈与の契約書署名式が行われ、次の建設が始まりました。第2期は、ジャナタ校で3階建て12教室の建設をおこないます。

署名後に握手をかわす在ネパール日本国大使館総領事の吉岡氏（右）と、チャイルド・ファンド・ジャパン支援事業部チームリーダーの中島（左）

ジャナタ校の校舎は、地震被災後に簡易な修復を行っただけの脆弱な校舎であり、また学校の敷地の真ん中を急流の川が流れるなど、安全面にも問題があったため、新たな敷地へ移転し、新校舎を建設します。ジャナタ校は国道からも遠い山間部の奥地にあり、周辺の山腹の地域から子どもたちが毎日歩いて、山道を登り降りしながら通学します。今年の11月頃までには、このような地で学ぶ子どもたちにも、安全で快適な設備の整った校舎で勉強する環境が整います。

新しく建設する校舎の敷地で工事がはじまりました

支援者の皆さま、
支援の輪をひろげる活動にご協力ください

チャイルド・ファンド・ジャパンの活動は、1952年、前身である基督教児童福祉会（CCWA）が、
アメリカのクリスチャン・チルドレンズ・ファンド（CCF）から支援を受けて、
第二次大戦後の厳しい環境のなか、児童養護施設で生活する戦災孤児たちの
健全な成長を支えるところから始まりました。
当時、決して豊ではなかったアメリカ・カナダの人々からの寄付は26年間で56億円にのぼり、
86,000人の日本の子どもたちがその恩恵を受けました。
1974年、CCFが日本の子どもたちへの支援を終結する際、
CCWAはこれまでの善意を途切れさせるのではなく、「愛のバトンタッチ」として
順送りの恩返しをすることを決め、1975年より国際精神里親運動部を設置して、
国際協力活動を開始した歴史があります。
それから45年、アジアの子どもたちが健全に成長し、教育を受けるための支援を続けてきました。
これまでに約30,000人の子どもたちが支援を受け、
フィリピンでは支援を受けた子どもたちの進級率が98％まであがる成果を得ています。
子どもたちの成長を見守ってくださる皆さまからの温かいご支援に、職員一同、心より感謝申しあげます。
活動45周年を迎え、私たちは
「すべての子どもに開かれた未来を約束する国際社会の形成」の実現に向けて、
さらに多くの子どもたちを支援していきたいと思っております。
長年、子どもたちを支えてくださる方々がいらっしゃる一方で、この支える喜びがなかなか広がらず、
新しくご支援くださる方々が思うように増えておりません。

支援者の皆さま、ご友人やお知り合いの方に
チャイルド・ファンド・ジャパンの活動をご紹介いただけませんでしょうか。

すでにご支援くださっている皆さまだからこそ、
私たちの活動の意義や良さを身近な方々にお伝えできると考えております。
今回、ご紹介いただく際にご使用いただくリーフレットを
同封いたしました。どうぞご利用ください。
チャイルド・ファンド・ジャパンは厳しい環境の中でも子どもたちが守られ、
子どもたちが自らの可能性を拡げられるよう、引き続き活動をおこなってまいります。
厳しい環境にある子どもたちを少しでも多く支援できるよう、
支援の輪をひろげる活動にご協力をよろしくお願い申しあげます。

ご自宅に眠る品物で支援を！

～物品寄付ご協力のお願い～

書き損じた年賀状、不要になった本、処分するにはもったいないアクセサリーなどございませんか?チャイルド・ファンド・ジャパンでは、物品の寄付を受け付けています。ご家庭で眠っているお品物をぜひお送りください。

例えば・・・

1,000円で、子ども1人に
学用品セットを贈ることができます。

学用品セットを受けとる子どもたち

書き損じハガキや年賀状、未使用の切手は
「チャイルド・ファンド・ジャパンの事務所」へお送りください。

〈送付先〉〒167-0041東京都杉並区善福寺2-17-5
チャイルド・ファンド・ジャパン　ハガキ係宛

ご不要になった古本は「チャリボン」へお送りください。

https://www.childfund.or.jp/support/usedbook.html

charibon

ご自宅に眠る古物は「お宝エイド」へお送りください。

https://www.childfund.or.jp/support/otakaraaid.html

家に眠る「お宝」でNPOに寄付できるプログラム
お宝エイド®

インフォメーション　コーナー

お知らせ　領収証の発送が完了しました

2019年にいただいたご寄付の領収証の発送が完了いたしました。チャイルド・ファンド・ジャパンは、「認定NPO法人」に認定されており、ご支援くださる皆さまには、所得税、法人税、相続税などの税制上の優遇措置を受けていただくことが可能です。特に個人の方がチャイルド・ファンド・ジャパンに寄付をした場合、最大で寄付金額の約40%を、所得税から控除できます。一般的に、税額控除方式を選択されると所得控除方式より大きな減税効果が見込まれます。
詳しくは「寄付金控除について」のページをご覧ください。
https://www.childfund.or.jp/support/deduct.html

チャイルド・ファンド・ジャパン　寄付金控除　検索

お知らせ　チャイルドと家族が自立を迎えました

フィリピンのルソン島イフガオ州にある協力センター28は、チャイルド・ファンド・ジャパンとの協議の結果、2020年5月末で地域での活動を終結することに合意しました。活動を開始した1995年からの25年間に680名のチャイルドたちが支援を受けました。今後は地域の人々が主体となって子どもたちの成長を見守り、自らの力で地域を支えていきます。これまでの皆さまの大きなご支援に心よりお礼申しあげます。

ChildFund Japan　**Vision Mission**

**チャイルド・ファンド・ジャパンは
ここに掲げるビジョン（目標）、ミッション（使命）に
基づいて活動します。**

ビジョン（目標）
**すべての子どもに
開かれた未来を約束する
国際社会の形成**

ミッション（使命）
**生かし生かされる
国際協力を通じて
子どもの権利を守る**

チャイルド・ファンド・アライアンス　ChildFund Alliance

人種、宗教、性別、国籍を問わず世界の子どもたちに、効果的な支援活動をするためのネットワークで、子どもたちに向けたスポンサーシップ・プログラムを行う11団体から構成されています。チャイルド・ファンド・ジャパンは2005年4月に加盟しました。

＜チャイルド・ファンドだより SMILES（スマイルズ）＞　2020年2月発行

特定非営利活動法人チャイルド・ファンド・ジャパン
〒167-0041 東京都杉並区善福寺2-17-5
理事長／長山信夫　事務局長／武田勝彦
TEL. 03-3399-8123　FAX. 03-3399-0730
E-mail:childfund@childfund.or.jp
URL:https://www.childfund.or.jp/

〈デザイン〉
モスデザイン研究所
〈印刷〉
有限会社東西印刷
PRINTED WITH SOYINK
大豆油インキを使用